

チベット語と日本語を媒介する者として

海老原志穂

二〇二〇年三月上旬、私は中国と国境を接するネパール北中部の地域、ラスワにいた。滞在の目的はネパール側と中国側双方のチベット語の方言調査。二〇一五年のネパール大地震の影響が落ち着いてから、中国側のチベット・キロン地方とネパール側の国境通過はしばらく可能となっていたが、パンデミックで国境は再び閉鎖され、ネパール側のみでの調査となった。

文法から文学へ

これまでに記述されていない言語の音や文法の仕組みを記述する「フィールド言語学者」にあこがれ、チベット各地を訪れるようになってから二十年。長期休暇のたびに中国内のチベット地域やインド、ネパール、ブータンでチベット語の言語調査を行ってきた。言語を調査するとは具体的に何をするかといえば、まず、「空」「太陽」「光」からはじま

り、身体部位、動詞、形容詞などが含まれた二千語ほどの単語の発音を音声記号で記録する。音の体系がなんとなくわかっただけで、「Aさんはもうすぐ来る」「雨が降っている」のような例文の発音も記録し、文法の記述と分析を進めていく。民話などのまとまった談話を書き起こして資料として利用できることにより、言葉の仕組みを明らかにすることはひとつづつピースをはめていくパズルに似ている。しかし、そのパズルがいったいどんな絵柄なのかは完成に近づくまでわからない。完成に近づいても、反例がみつかったら一度組み立て直し、ということもある。

言語の調査と記述は地道な作業の繰り返しだ。でも、言葉の中にひそむある程度は規則的で、時に不規則なルールをみつけるのはとても楽しい。そして、チベットの人たちの頭の中はいったいどうなっているのかを私は知りたい。言葉の仕組みがわかればその疑問もとけるかもしれない。

場所はない
滝よ、滝
ほくらの心は、おまえの歩みにあわせ
て躍動する
ほくらの血も、おまえのうねりにあわせて流れる
未来の道が
これまで以上に曲がりくねっているように
うと
ほくら若人には恐れを感じている暇
なぞない
おのが民族のため
新たな前進の道を確かに切り開くのだ
(トンドゥブジャ作「青春の滝」の一節)

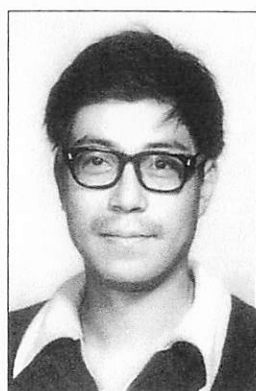
れないと、言語研究をつづけてきた。だが、しだいに文法だけではものたりなくなってきた。チベット人の生の声や彼らの表現に直接触れたい。そんな思いから、チベット語で出版された現代文学作品を読み、仲間らと翻訳をはじめた。

「最初の人」の小説と詩

ここで、チベットの現代文学について簡単にお話ししたい。

チベット人の暮らしや文化は仏教の影響を大きく受けている。文学においても、仏教の教えが主なテーマでありつづけて、仏教説話や宗教体験をうたった詩が書かれてきた。そんなチベットで、仏教指向から離れ、人々の喜びや悲しみ、恋愛、別れ、そして、孤独などの心のうつろいが文学として書かれるようになったのは、一九八〇年代になってからのことだ。

文化大革命が終わり、宗教や文化が復



トンドゥブジャ (1953 — 1985)

興の兆しをみせる中、ある青年がチベットの若者たちに衝撃を与えた。彼の名は「トンドゥブジャ」。チベット語の現代文学をはじめた代表的な人物だ。チベットの古代史を研究するかわら、チベットの伝統文学や、中国経由の外国文学も吸収し編み出した新たな文体で彼は書いた。若者たちの気持ちを代弁する小説を。ほとばしる熱い思いや希望をのせた自由詩を。彼の代表作である自由詩「青春の滝」の一節を引用しよう。

ほくたち
——有雪国チベットの新たな世代の理想を表している
保守主義、小心、盲信、怠慢……
ほくら新世代にはそんなものがつけいる隙はない
後進、野蛮、闇、反動……
ほくら新世代にはそんなものが居座る

この、チベットの現代文学の道を切り開いた「最初の人」、トンドゥブジャの小説と詩のアンソロジーが、チベット語から日本語に翻訳された現代文学の一冊目となった(チベット現代文学の曙、ここにもしも激しく躍動する生きた心臓がある) 勉誠出版、二〇二二年)。

最初の人であったトンドゥブジャの作品はチベットの多くの若者たちを力づけた。その中から、創作する勇気をもらい、小説や現代詩を書く人が現れはじめた。そして、トンドゥブジャの後の世代によって、テーマや文体も多様な作品が書かれ、日本語で読めるチベット現代文学の翻訳書もこの十年に年一冊ほどのペースで刊行されてきた。また、二〇一三年からは、トンドゥブジャの翻訳に関わったメンバーで「チベット現代文学と映画制作の現在」SERNYALという冊子を刊行し、小説や詩の翻訳と文化情報を発信してきた(二〇二三年八月現在、七号まで刊行)。これまで存在すら知られていなかったチベット語による現代文学はこの十年、日本においてもしだいに存在感を増してきた。しかし、たくさんの作品に触れる中で、気になることも増えてきた。それは、チベット文学の中で、女性の作家がなぜこんなに少ないのかということだ。

チベット女性の創作

上述の冊子「チベット現代文学と映画制作の現在」SERNYALでは、一号から毎号、チベット現代詩の翻訳を掲載してきた。これまでに、男性詩人七名、女性詩人三名を紹介した。小説家の女性も取り上げた。彼女たちとは、いずれも知人を介して知り合うことができた。二〇一〇年代の中頃までは、チベットの女性作家の本は現地の書店でもほとんどみかけることがなかった。チベット語文芸誌の老舗季刊誌「ダンチャル」でもひとつの号に作品が掲載される女性作家は多くても一人だ。しかし、二〇二〇年に近づ



デキ・ドルマ (1967-)

ある日、突然
携帯に電波が入らなくなった
紙に書いた文字もどこかに消えてなくなつた
トルコ石の耳飾りも珊瑚の首飾りもこぼれ落ちた
履いていた靴も地面に沈みはじめた
徐々に 私の頭は空となり
肉体も溶け、空気にまじり合つて見えなくなつた
私がいくら探しても「わたし」はみつからない だから
消えた「わたし」は 両手で

女性詩人たちとは、LINEのようなSNSアプリ「微信 (WeChat)」で連絡をとりあつてゐる。「チベット女性詩集」の翻訳作品を決める際も、各作家とやりとりした。文学史的に重要なものをまず選び、あとは、なにかしらのひっかかりを感じた詩を訳し、その中から日本語の詩として違和感のない作品を選んだ。この詩は政治的解釈もできるので、ひよつと

チベット語と日本語を媒介する者として

一本の金梅草を捧げ持ち
いつか「わたし」を探しとめる人た
ちが
六月の青々とした草原をかき分け
みつてくれるその日まで 花の香り
をふりまいてゐる
(デキ・ドルマ作「消えた「わたし」」)

仏教とは、苦しみを生み出す原因である「自我」をなくすことを説く教えだ。携帯電話という通信手段、自らを飾り立てる装飾品も失い、果てには肉体も溶け、草原という自然に溶け込み、世界と交感する。近代的な自我を超えた境地をデキ・ドルマは言葉で示してみせた。も

女性詩人だからこそ、表現することができた光景なのかもしれない。

したら原作者から掲載を断られるのでは？ そんな訳者の危惧をよそに、送った作品リストに異を唱える詩人は一人もいなかった。それは、チベットの女性詩の発表の場の少なさや、注目度の低さを反映しているのかもしれない。
詩の翻訳の一番の難しさは、原作者の意図を理解すること、そして、言葉の多義性に対して読者の解釈の余地を残すことだ。原作者の意図をくみすぎて平面的な訳になつてもよくないし、読者の解釈にゆだねすぎてよくない。読者の解釈にチベットの女性詩人の声を日本の読者に伝えたい。願わくば、日本語としても読める詩にして。校了までの最後の一ヶ月は、この二つのバランスに心を砕いた。そして、彼女たちの創作への共感の気持ちは最後にひとさじふりかけた。私

の場合は研究者であるのをよいことに。私野暮を承知で解説とコラムもつけた。少なくとも、わかりやすい翻訳詩集にはなつたのではないかと思う。

チベットの女性の創作もこれから益々増えていくだろうと、表現の幅も広がっていくだろう。「チベット女性詩集」に収録された作品を現時点での状況としてとらえ、チベット語と日本語を媒介する者として、これからの定点観測をつづけていこう。



ホワモ (1966-)



『チベット現代文学と映画制作の現在 SERNYA』(vol 1-7)

くにつれ、その状況が変わつてきた。書店で女性作家の叢書を見かけるようになったのだ。それも複数の出版社から。これはなにかが起きている。そう感じてチ

ベット女性の創作について調べはじめた。
仏教的な文化背景のもとで一四〇〇年もの間、チベット文学は男性中心のなものであった。女性たちは作品を発表できるようになったのは、現代文学がはじまった一九八〇年代以降のことだ。そして、その後、女性の作家たちは徐々に新たなテーマを詩に表現し、女性詩のアンソロジーや女性の創作の叢書を企画するなど、チャレンジをつづけてきたこともわかった。しかも、二〇二二年からはアメリカやフランスの研究者を中心にチベット女性の創作に関するシンポジウムが何回も開かれていた。私も発表の機会をもらい、チベット女性詩の中で特に重要な作品をいくつか訳してみた。そのひとつが「私に近寄るな」だ。

私に近寄ることは金輪際ゆるさない
私は誰のものでもない
(ホワモ作「私に近寄るな」の一節)

この一節を口にした時、胸がすつとし、一種のカタルシスをおぼえた。その他にも、女性詩の歩みを知ることではじめて理解できた詩がいくつもあつた。それがきっかけとなつて翻訳・編集したのが「チベット女性詩集 現代チベットを代表する7人・27選」(段々社、二〇二三年)。チベット女性詩の歩みについて

チベット女性詩集

現代チベット文学の精華を収録
チベット語・英語・日本語の三語対訳

チベットの大地からあなたへ
感動と新たな視座

ジェンダー、生命の誕生、結婚の儀式、死後の世界……
隠された世界をさらけ出し
女性詩人たちの心と魂をうたう

12歳以上・中学生以上・高校生以上
チベットの女性詩集を学ぶためのガイドブック

三月末に「チベット女性詩集」を刊行してから四ヶ月が経ち、いくつかの新聞や雑誌、会報、ブログなどでこの本をとりあげていただく機会があつた。詩の翻訳も紹介されたが、引用されたのはほぼすべて「私に近寄るな」だった。自らの尊厳を高らかにうたいあげたこの詩のつ力をあらためて感じた。日本の男性研究者の方から、「女性ならずとも、私に近寄るな」ということは多々ありますよね。痛快な詩です」といった感想もいただき、ジェンダーを超えて気持ちのよさを思ひ知った。
同書から詩をもう一編、紹介しよう。叫びのようなメッセージの込められた